

タイワンガザミの行動は、夜行性の傾向が強く、日中は眼と甲前縁部をわずかに露出し潜砂しているか、物陰に隠れている。人工飼育した稚ガニを使用して行なった室内照明下のシャーレ内観察では、稚ガニの潜砂状況は次の4段階に分けられた。①：砂面上にじっとしている。または歩き廻り全く潜砂しない。②：脚で体高の半分くらいまで穴を掘り、その中でじっとしている。③：甲の高さまで穴を掘るが、甲上部に砂を被らないので、上方からは丸見えである。④：③が更に進み、甲後部から砂をしゃくり上げるように体全体を上下に動かすことによって、眼と甲前縁部以外は砂で被われる。潜砂能力の発達は、②から進んで④で完成した。海水を満たしたシャーレに収容された稚ガニは、水中を斜めに下り、ほとんどの個体が潜砂行動を始め、数分内で潜砂行動を終了する。以後、潜砂と歩行を繰り返す個体がわずかにみられ、しだいに潜砂個体が多くなった。図6に5分後と60分後のC1-5の潜砂状況を示した。試験はC1-4で2~5回行ない、その平均結果で示し、C5ではC5の出現当日に1回行なった結果を示した。タイワンガザミの潜砂行動は1令期からみられ、5月9日に行なったC1の潜砂状況は、甲上部まで完全に潜砂を行なう個体が5分後で50%、更に60分後では60%に増加した。全く潜砂しない個体は5分後で35%、60分後で10%に減少した。C1-5の潜砂状況は、令期が進むにつれて潜砂個体の割合が増加した。C5の試験で全く潜砂しなかった個体が5分、60分後ともに5%も出現したのは、試験がC5出現当日に行なったため、甲がまだ十分に硬くなってない個体が入っていたと思われた。同様なことはC1出現当日(5月8日)に行なった試験でも、C1の潜砂状況は前記に比べ、潜砂個体が少なく砂面上の個体が多い傾向を示した。

以上のことから、潜砂場所のない水槽で人工飼育したカニでも、1令期からすぐに50%以上が完全に潜砂能力を有することが示された。しかしながら、種苗放流サイズを決定するには、放流現場の状況、カニの行動等も合わせて十分に検討する必要があると思われた。

II ノコギリガザミの種苗生産

ノコギリガザミの抱卵体は、天然ではほとんど採捕されないため、親ガニを養成して抱卵させる必要がある。今年度は、親ガニを2㎡水槽2区、10㎡水槽1区で各10~20個体の親ガニを養成したが、親ガニは抱卵しなかった。また、天然産の抱卵親ガニも得られなかったため、種苗生産試験は行なえなかった。